

マレーシア・サラワク州における都市-村落間の食品流通と食生活の変容

平成 25 年入学

派遣先国:マレーシア

今井 明日美

キーワード：食料安全保障，食文化，サラワク州，流通

対象とする問題の概要

食料安全保障とは「すべての人が、いつでも、必要とする基礎的食料を物理的及び経済的に入手することを保証する」ことである [FAO 1997: 117]。1996 年にローマで開催された世界食糧サミットにて、食料安全保障の確保を目指した指針および方策が策定された。

食品の多くを輸入に頼るマレーシアにおいても重要な課題である。世界的な米の価格高騰を背景に、コメの自給率向上を目指す食糧安全保障政策が試みられている。米の生産向上に向け、半島部に比べ作付面積が少ないサバ州・サラワク州のインフラ整備などに取り組むが、米の 8 割強を生産しているのは西マレーシアである。依然としてサラワク州は灌漑設備整備が遅れている上、アブラヤシなどのプランテーション作物の栽培が盛んである。

先行研究においては西マレーシアと東マレーシアが異なる政治的枠組みを有すること、東マレーシアの土地が米の生産に向いていない点を見落としていることが指摘されている [Wong 2012]。

研究目的

そこで本研究では上記のような問題背景を持つサラワク州を対象とし、とりわけ同地域内陸部に暮らす人々の食料へのアクセス可能性、食生活の変容と食料の入手可能性の関係について明らかにする。さらに農業政策に基づくマクロな視点だけではなく、流通・消費の過程すなわちミクロな視点との連続性にも焦点を当てて食料安全保障確保を考える視点を提示することを目的とする。

その理由は以下の先行研究にある。食料生産・流通・消費からなるあらゆる食に関わる次元は相互に関連しているため、切り離さずに食料安全保障に関する政策を立案する必要性が主張されている [ポチエ 1999]。つまり、食料生産の向上に重点を置く同国の食料安全保障政策で重視されていない各家庭への流通・消費の実態を明らかにする。そのようなミクロな側面だけにとどまらずマクロな側面と結合させて食料安全保障に取り組む視点を提示することが将来的な展望である。

フィールドワークから得られた知見について

今回の渡航では州都クチンにあるサラワク大学にて、語学の学習および資料収集を主に実施した。またカウンターパートの先生の調査に同行した経験から、同国の食料安全保障に関する研究へ

の意欲が高まった。今回はサラワク州中部の沿岸部に位置するビントウル（Bintulu）での調査に同行させていただいた。沿岸の都市から中流域の町ツバウ（Tubauh）まで車で向かい、そこからボートで約1時間川を上ったところにあるロングハウスを訪れた。



写真 1: (左) ロングハウスでの食事。写真のように野菜が食卓に上ることは珍しい。



写真 2: (右) 上流域にあるロングハウスの周辺環境。

そこで内陸部に住む人々の食料事情を垣間見ることができた。山積みの米袋、大量の缶詰・インスタント麺など長期的に保存可能な食品が備蓄され、川で獲った魚や豚肉は発酵食品に加工して食す。その一方野菜や果物の備蓄は少なく、野菜が食卓に並ぶことは珍しい。加えてロングハウス周辺では農業をしている様子はなく、ヤシ、パパイヤ、トウモロコシをわずかに栽培している程度である。そのため食材を入手できる最寄りの場所は中流域の町である。しかしツバウの対岸までしか道は通じていないため、都市から車で運んだ食品を町に運ぶにも人手が必要である。加えて商店に並ぶ野菜もごくわずかであり、種数が少ない。



写真 3: (左) 中流域の町にて販売される野菜。種数が限られている上、葉物野菜が少ない。



写真 4: (右) 中流域の町。道路が町の手前で寸断しているため、食品や雑貨を運ぶのも容易ではない。

一方、沿岸部の町では大きな市場・ショッピングセンターにて多種多様な食糧が入手できる。ホーカーと呼ばれるフードコートや屋台では多種多様な料理が提供される。エスニシティの多様性を料理の種類の多さから垣間見ることができる。しかしここに同国が抱える健康や栄養面に関する食の問題が顕著に表れている。大量の砂糖が入った飲み物、油を多用した料理は人々の舌を楽し

ませる一方で人々の健康を脅かす。このような食生活は都市だけではなく、内陸部でもみられた。

ここから、食糧安全保障の確保のために同国で考えるべき問題は農業政策だけではないと考える。そのため、流通と消費の過程にも重点を置いた研究に取り組む必要があると上述の体験から考える。



写真 5: (左)クチン市内のホーカー。豚肉を使う中国系向けの屋台と豚肉を食さないムスリム向けの屋台が一つの空間の左右に分かれて存在する。

写真 6: (右)ビントゥルの市場の場内。

今後の展開・反省点

まず今回の反省点は、語学の学習および自分の研究テーマに関する事前準備が不十分だったことである。基礎的な文法事項の復習が十分できていればより効率的に学習を進められたのではないかと考える。さらに研究テーマに関しても、目的や問題意識をより明確にしていたら、現地の研究者やカウンターパートの先生とより積極的に意見交換を行い、より多くの助言を頂くことができたのではないかと考える。以上の理由から事前の準備不足が悔やまれる。

しかし語学を自然と学ぶ環境に身を置くことができ、さらには先行研究だけでは知り得なかった現場の実態を知ることができた。そのため、助成によって同地域に渡航できたことおよび多くの方にお世話になったことに感謝し、今回の渡航で学んだことを今後の研究で生かしたいと考えている。今後の課題は、調査に向けて引き続き語学の学習に励み、現場で抱いた関心をもとに研究の方向性をより具体化することである。



写真 7: (左) 今回滞在したサラワク大学のキャンパス内の様子。

写真 8: (右) お世話になったサラワク大学・東アジア研究所の研究者および職員の皆さんとの記念写真。

参考文献

ポチエ・ヨハン著, 山内彰・西山隆訳. 2003. 『食糧確保の人類学ーフードセキュリティー』.
法政大学出版局.

国際連合食糧農業機関 編著 (FAO). 1997. 『世界食糧サミットとその背景-FAO 世界の食料・農業データブック-[上] ローマ宣言/ 行動計画/ 世界の食料安全保障』. 社団法人国際食糧農業協会.

Wong,L.C.Y. 2012. “Food Security and Growth: Malaysia’s Strategic Approach and Future Adjustments”. *CRRC Consumer Riview*.<http://www.isis.org.my/attachments/1256_LW_Food_Security_CRRC_V5Mar2012.pdf> accessed: 2013/11/25.